

光景)を、私は考えています。「豊旗雲」については、もっともっと追求したいテーマです。

横田：本日は、貴重なお話を沢山うかがいました。有難うございました。

あとがき

山根 悟子報官は雲の写真をこれまでに何と1万枚も

撮影してあるという。本稿は、技術の円滑な継承を目的として筆者が行っているインタビュー企画「予報官の道」の中から興味深い部分に焦点をあてたものである。雲の撮影は、言うは易く行は難い。学校気象教育における教材作成等にも参考となれば幸いである。



M. パリー著、内嶋善兵衛訳、

「気候変化と食糧生産」

農林統計協会，2,400円，159ページ

この本の著者マルティン・パリー教授は、UNEP (国連環境計画)・WMO (世界気象機関) の WCIP (世界気候影響研究計画) 科学諮問委員会の委員であり IPCC (気候変化に関する政府間パネル) の気候変化と農業のとりまとめ役であった。日本へも2度来られよく知られている。現在はオックスフォード大学に新設されたこの分野の研究センター長で、多くのプロジェクトを指導運営している。

UNEP と IIASA (ウィーン郊外のラクセンブルクにある国際応用システム分析研究所) による世界の乾燥限界地域と寒冷限界地域から数地域を選んで「地球温暖化がその地域の農業にどのような影響を及ぼすか」という国際的研究プロジェクトが、彼とその協力者によって進められた。その結果は2冊の大冊となって1988年にすでに刊行されている。日本もそのプロジェクトに参加した一つの国である。本書はこの結果を骨子として、専門家以外の人にも読みやすく、手軽なものとし、1990年夏に向けてまとめられた IPCC の報告をも取り入れて肉付けしたものである。

第1章は気候変化への農業の敏感度、第2章は予想される気候変化、第3章は気候変化のインパクトの事前評価法、第4章は植物・土壌・害虫そして病気への影響、第5章は農業ポテンシャルへの影響、第6章は生産と土地利用への影響、第7章は世界の食糧安全保障にとっての気候変化の意味、第8章は気候変化への適応、第9章結論となっている。これらの章の組み立てでもわかるよ

うに、真の意味の“農業”の問題を取り扱っている。地球温暖化の農業への影響は、今日、多数の分野の研究者が研究しているが、農業と言いながら、作物(植物体)への影響の測定や、収量変化の推定だけで終わっていることが多い。問題はポテンシャル栽培地域の移動であり、地域総生産ポテンシャルの変化である。さらに、作物帯の変化、これは土地利用の変化でもある。これらを考慮に入れて世界の食糧生産変動を研究しなければいけない。本書はこういう問題を正面から扱ったもので、小冊子ながら重要な内容を論じており、類書がない好著である。

また、第2回世界気候会議(1990年10～11月、ジュネーブ)で、パリー教授を始め数人の報告者がはからずも一致して言及した気候変動に対する適応(adaptation)の問題が第8章に論じられている。大きくわけると、土地利用の変更と管理様式の変更の二つになる。前者は耕地面積・作物タイプ・作物栽培地域などの変更で、後者は灌漑・肥料使用・害虫と植物病気の防除・土壌排水と土壌侵蝕の防止・農場生産基盤や作物と家畜の管理などの変更である。量的にこれらをそれぞれ推定し農業政策に組み込むのは非常にむづかしいが、21世紀の気候変化を農業発展にどのように取り込んでゆくかは、このような“適応”の問題をぬきに議論することはできず非常に重要である。

「天気」の読者は、気候変化が将来のわれわれの食糧問題にどうかかわるか、専門的研究者か否かを問わず、ぜひ考えてみる必要がある。その意味で、本書は推薦に値する良い書物と思う。また、12冊以上の訳書を出版された内嶋善兵衛教授の訳は、言うまでもなく好訳で、本書の内容をひき立たせている。

(愛知大学文学部 吉野正敏)